蔵人得業猿沢の池の龍の事

これも今は昔、奈良に、蔵人得業恵印といふ僧ありけり。鼻大きにて、赤かりければ、「大鼻の蔵人得業」といひけるを、後ざまには、ことながしとて、「鼻蔵人」とぞいひける。なほ後々には、「鼻蔵鼻蔵」とのみいひけり。

それが若かりける時に、猿沢の池の端に、「その月のその日、この池より龍登らんずるなり」といふ札を立てけるを、往来の者、若き老いたる、さるべき人々、「ゆかしき事かな」と、ささめき合ひたり。この鼻蔵人、「をかしき事かな。我がしたる事を、人々騒ぎ合ひたり。をこの事かな」と、心中にをかしく思へども、すかしふせんとて、空知らずして過ぎ行く程に、その月になりぬ。大方大和、河内、和泉、摂津国の者まで聞き伝へて、集ひ合ひたり。恵印、「いかにかくは集る。何かあらんやうのあるにこそ。怪しき事かな」と思へども、さりげなくて過ぎ行く程に、すでにその日になりぬれば、道もさり敢へず、ひしめき集る。

その時になりて、この恵印思ふやう、ただごとにもあらじ。我がしたる事なれども、やうのあるにこそと思ひければ、「この事さもあらんずらん。行きて見ん」と思ひて、頭つつみて行く。大方近う寄りつくべきにもあらず。興福寺の南大門の壇の上に登り立ちて、今や龍の登るか登るかと待ちたれども、何の登らんぞ。日も入りぬ。

暗々になりて、さりとては、かくてあるべきならねば、帰りける道に、一つ橋に、盲が渡り合ひたりけるを、この恵印、「あな、あぶなのめくらや」といひたりけるを、盲とりもあへず、「あらじ。鼻くらななり」といひたりける。この恵印を、鼻蔵といふとも知らざりけれども、めくらといふにつきて、「あ

らじ。鼻暗(はなくら)なり」といひたるが、鼻蔵に言ひ合(あは)せたるが、をかしき事の一つなりとか。

小林智昭校注･訳『宇治拾遺物語』（日本古典文学全集）、小学館、 **1973** 年 **6** 月